第５節　宝満山の文化財・文化遺産

１．文化財（史跡、建造物、石造物、その他）

（１）内山辛野遺跡

太宰府市の内山･北谷に広がり、中世の庭園を含む遺跡で、平成 16 年 1 月 30 日太宰府市の史跡に指定された。遺跡はひな壇状の人為的造成面や石垣や土塁が残り、その中に数寄屋風の小規模な礎石建物と飛び石、組石からなる庭園遺構などが見つかっている（写真 3-31）。庭園については鎌倉時代から室町時代初期に属し、筑前守護武藤少弐氏との関わりが指摘されている。

写真 3-31　内山辛野遺跡

（２）竈門神社社殿（下宮）

竈門神社は宝満山中にあり、江戸時代までは山頂の社殿が「竈門宮」で、現在の神社本殿は「下宮」と称されていた。明治時代になり、山頂の社殿が「上宮」、中宮にあった仏教施設としての講堂が「神祇殿」、かつての「下宮」が竈門神社本殿となった。「上宮」は明治末年の木造の社殿と社務所があったが、社殿は昭和 27 年に焼失し、昭和 32 年（1957）に建替えられコンクリート造りとなった。社務所は昭和 20 年（1945）に公売され、無くなった。中宮の「神祇殿」は明治 28 年（1885）以降に廃絶、消失した。かつての「下宮」にある「本殿」は江戸時代からあった社殿が大正 14 年（1925）から昭和 2 年（1927）の間に立て替えられ、平成 25 年改修された（写真 3-32,33,34）。社殿は拝殿と本殿からなり、本殿は三間社流造、銅板板葺である。建物は拝殿より一段高い位置にあり、雨葛一段、石造亀腹上に西北面して建っている。拝殿は雨葛一段、自然石積み基壇上にほぼ西北面して建っている。正面三間、側面四間、切妻造、胴板葺の妻入り形式で、入側一間を土間床とし、正面に木階三級をつけ向拝形式とする。境内には本殿以外に木造の社務所、参籠殿等があったが、平成 23 年に改築され、現在は鉄筋コンクリート、一部木造の社務所と参集殿がある（写真 3-35）。摂末社は本殿南に「五穀社」（写真 3-36）、北に「須佐社」と「夢想権之助神社」がある（写真 3-37）。

◇竈門神社旧下宮境内の近世以降の変遷

慶長 2 年（1597）　小早川隆景による諸堂の復興。下宮も再建か。
安永 9 年（1780）　参道石鳥居建立。
安政元年（1854）　黒田藩による焼失した社殿の再建。
明治初期頃　仏教系堂社（圓光院、祇園社、大師堂）の廃止、破却。
明治 28 年（1895）　村社から官弊小社へ昇格。
明治 45 年（1912）　この頃までに石階段の造作など参道の整備あり。
大正 14 年（1925）～昭和 2 年（1927）　社殿と社務所の全面改築。社殿は切り土造成して規模が拡張される。
平成 25 年（2015）　社務所の建替。境内も園路を中心に整備が行われる。

写真 3-32　竈門神社旧社殿

写真 3-33　竈門神社社殿（平成 25 年改修前）

写真 3-34　竈門神社社殿（平成 25 年改修後）

写真 3-35　社務所・参集殿（平成 25 年建替後）

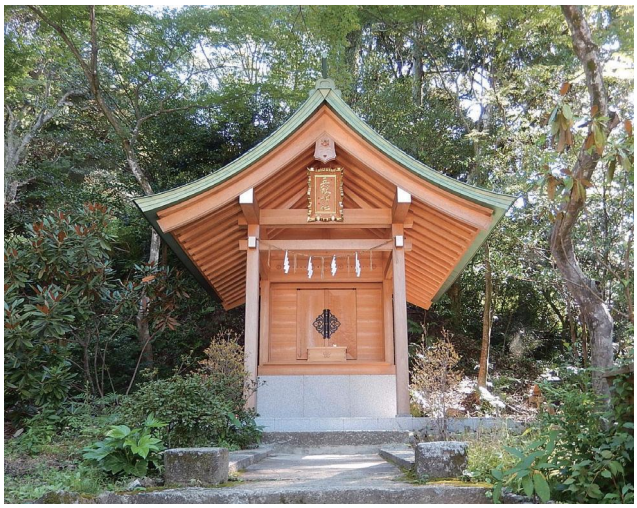
写真 3-36　摂末社（五穀社）

写真 3-37　夢想権之助神社

（3）宝満山の石造鳥居

宝満山山中には多くの鳥居が確認できる。

・愛嶽山の石鳥居

江戸時代・寛政３年（1971）に宮司新坊が本願し、近隣の大庄屋たちの発起により建立されている（写真 3-38）。

写真 3-38　愛嶽山の石鳥居

・上ノ鳥居

中宮跡には上ノ鳥居と呼ばれる鳥居があったが、現在は倒壊して部材が残されている。記録によれば、福岡藩２代藩主黒田忠之が寄進した鳥居があったが倒壊したため、３代藩主黒田光之が天和３年（1683）に再興した。

・一の鳥居

内山から山頂に至る登拝道にある鳥居で、一の鳥居と呼ばれ、延宝７年（1679）に建立された（写真 3-39）。宝満山で江戸期に建立された建築物は、廃仏毀釈によって破壊されており、この鳥居は宝満山に残る数少ない江戸期の建築物である。建立年代や施主が明確な鳥居としては市内で最も古いものである。平成 27 年（2015）10 月 20 日に太宰府市指定文化財に指定された。

写真 3-39　一の鳥居

・下宮の鳥居

下宮駐車場から最初の鳥居は近年のもの、次の石の鳥居は昭和３年（1928）に炭鉱王麻生太吉が奉献したものである。３つ目の鳥居は応永９年（1780）に加藤一純により建立されている（写真 3-40）。登山口の鳥居は、昭和２年（1927）に炭鉱会社「貝島合名会社」が建立。

これらの鳥居の建立をみていくと、建立者が福岡藩主や炭鉱会社、大庄屋など財力を持ち、社会的地位の高い人々が寄進していることがわかる。

写真 3-40　下宮の鳥居（３つ目の鳥居）

なお、一ノ鳥居は座主平石坊弘有が勧進し、福岡藩三代藩主黒田光之が檀主となっており、衆頭であった弘有が宝満山の復興に尽力した活動の証左として貴重なものである。

（4）竈門神社下宮の石造物

竈門神社の境内参道の左手に空閑地があり、そこに数点の石造物が確認できる。

a. 日あけ地蔵尊小堂内の台座で、大型の層塔もしくは宝篋印塔の塔身。鎌倉時代後期。花崗岩製。（写真 3-41）

b. 板碑。高さ 1.63 m。頂部を三角形の山形にし、二段の水切りを入れる整形板碑。碑面には梵字で不動明王が彫られている。伝金剛兵衛の墓。鎌倉時代後期～南北朝時代。（写真 3-42）

c. 板碑。高さ約 1.8 m。自然石を利用。大日如来の梵字を彫る。時期不詳。（写真 3-43）

これらは、中世段階の山中寺院、文献にみえる大山寺や有智山寺に関係する石造物と考えられる。

写真 3-41　a. 日あけ地蔵台座

写真 3-42　b. 板碑（伝金剛兵衛墓）

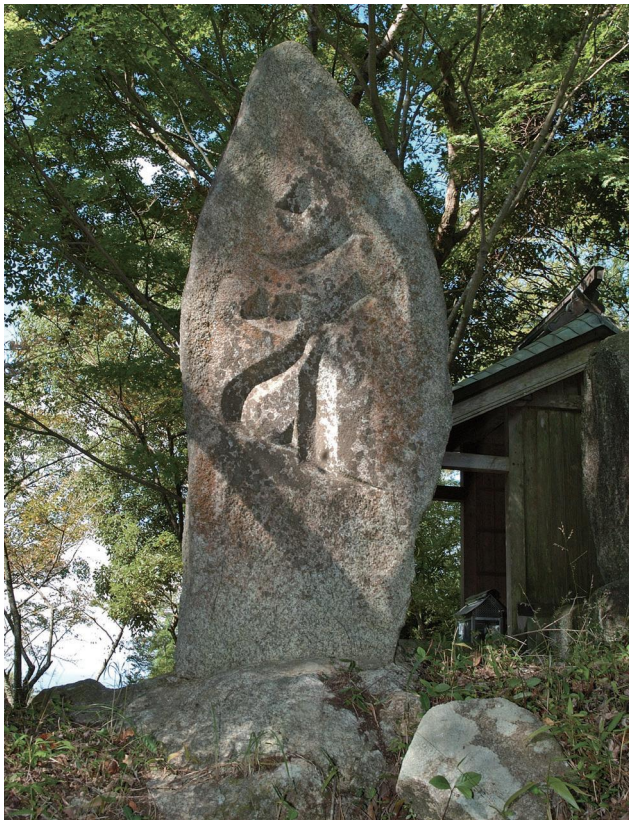

写真 3-43　c. 板碑

（5）宝満山関連資料

その他、宝満山に関連する文化財資料は以下のとおりである。

表 3-3　宝満山関連資料一覧表

所在	区分	種別	名称	員数	法量・特徴等	備考
竈門神社	県	指定文化財	木造狛犬	一対	木造　樟材　体部一対　彩色剥落 法量　現高　阿形 90.0㎝　体長 114㎝ 吽形 85.0㎝　体長 115㎝	
			毬とり獅子 （菊目石製）	一軀	現寸法　長さ 31.7㎝	完形時の寸法　総高 23㎝ 台座長径 25㎝
			銅鏡「水鏡」	一面	銅製 鋳造 径 36.5㎝ 外縁高さ 1.5 ～ 1.7㎝ 鏡厚 0.3㎝ 分銅鈕径 5.0㎝	
			「宝満宮」鏡		銅鋳造 柄付鏡 寸法 径 54.7㎝ 縁厚 2.0㎝	鏡台への柄長さ 4.1㎝ 厚さ 0.85㎝
	県	指定文化財	「聖母宮」鏡		銅鋳造 寸法 径 45.7㎝ 縁厚 0.8㎝ 鏡面厚 0.4㎝	鏡台への柄部長さ 4.3㎝　厚さ 0.7㎝
	県	指定文化財	「八幡宮」鏡		銅鋳造 寸法 径 44.9㎝ 縁厚 0.85㎝ 鏡面厚 0.45㎝	鏡台への柄部長さ 3.85㎝ 厚さ 0.6㎝
			「キリーク」鏡		銅鋳造 寸法 径 36.2㎝ 縁厚 0.9㎝ 鏡面厚 0.3㎝	
	県	有形民俗 文化財	宝満山山岳信仰 関係資料	307 点	神事・仏事の用具、絵画、文書等	江戸時代～昭和 上記 7 点（木造狛犬、鏡ほか）は、宝満山山岳信仰関係資料にも数えられている。
東京国立 博物館	国	重要文化財	金銅製菩薩立像	一軀	銅鋳造 寸法 総高 20.6㎝ 像高 17.6㎝	宝満 A 経塚
東京国立 博物館	国	重要文化財	銅製経筒	一口	銅製 鋳造 高 26.6cm	（経巻残塊共）附として敷石 1 枚あり。外容器、経筒、小金銅仏、陶磁器（白磁Ⅴ類碗、白磁皿、小壺）、金属製品（銅製鈴）が併せて出土。平安時代、12 世紀。宝満 A 経塚
太宰府市			金銅製菩薩立像	一軀	銅鋳造 寸法 総高 10.5㎝ 像高 8.9㎝	
			小金銅仏	一軀	寸法 高 11.8cm 幅 3.3cm 厚 2.8cm	如来像。奈良時代前期～平安時代前期頃。
個人蔵			薩摩塔	1 点	薩摩塔。石造。高さ約 50cm、幅約 25cm。	中世の石塔。伝宝満山中出土。 宝満の寺にあったものを天満宮社家の小野家が邸内に移設し、それを昭和初期に個人が譲りうけたと伝わっている。
北谷 地蔵堂	県	指定文化財	木造地蔵菩薩立像	一軀	桧材 一木造 像高 127.0㎝	
筑紫野市	市指定	有形文化財 （歴史資料）	柚須原の瓦質祠	1 点	野外で神仏を祀るための祠。 7 点の破片資料。 資料の表面には、平石坊弘有の銘が彫られている。	寛文九年（1669）
九州国立 博物館			銅製瓔珞付経筒	一口	銅製・鋳造 総高 28.4cm、蓋径 12.0cm、高台径 9.6cm	天永元年（1110）銘。宝満 B 経塚

2．文化遺産（民俗）

（1）宝満山峯入り

江戸時代には春秋 2 季に行われた修験道の行事で、春は宗像方面、秋は英彦山方面の山伝いに、修行と布教を行いながら山伏が集団で移動した。近代以降は山伏が離山したことにより途絶えがちであったが、昭和 57 年（1982）の宝満山開山心蓮上人 1300 年遠忌を期して、山伏の末孫や宝満山を修行の場とする山伏らによって宝満山修験会が結成され、毎年 5 月に竈門神社を起点として山頂、仏頂山に至る峰入りの行事が復興され、現在も継続している。（写真 3-44）

平成 25 年（2015）4 月には同会により、宝満山開創 1350 年を記念して、約 150 年ぶりに宝満山から英彦山に至る峰入りが行われ、筑紫野市が同行調査を行った。

（2）宝満山十六詣り

宝満山の近郷では成人儀礼として、数え年 16 歳になった男女が宝満山に登る慣習があり「十六詣り」と呼ばれていた。女性は良縁が、男性は金運が授かるとされ、集落などの単位で男女それぞれがグループとなり山頂まで登拝していた。戦後の高度成長期頃から廃れたが、平成 26 年（2016）から宝満山修験会協力のもと地元有志により、毎年 4 月の行事として再びおこなわれるようになった。（写真 3-45）

写真 3-44　宝満山峯入り

写真 3-45　宝満山十六詣り

（3）北谷からの遥拝

北谷の村氏神の地位にある竈門神社新宮は、内山の竈門神社が明治 28 年に官幣神社昇格した際に、社名を「竈門神社遥拝所」とされた。当該期に上宮が本殿であった竈門神社を里から遥拝する施設と位置付けられていた。

しかしながら当該神社は、「宝満宮」、「新宮」、「新宮宝満社」と様々に呼ばれ、明治期以前には今の場所より高所の「モトミヤ」と呼ばれる場所にあったとされ、長らく里と山頂とをつなぐ信仰の要所の社であり、近世には宝満山伏が交代して祭祀をおこなっていたことが知られている。

北谷に所在するこれら遥拝所や参拝者への道しるべなど宝満山の麓の習俗を考慮すると本来であれば、史跡宝満山に関わる範囲は広く考えなければならないが、現在のところ指定地内にある文化財・文化遺産については、上記のとおりである。

写真 3-46　竈門神社新宮（北谷遥拝所、宝満宮）